



Ichinokura

著 一ノ蔵

ill. にとろん



ウルシア

.....
ミオが転生した世界
ユーザフェースの
女神。

まゆうちゃん

.....
神様に貰った
ロストカラーエッグ
迷彩卵から
産まれた生物。
カーバンクル
らしいが...



エイル

.....
エルフの賢者。
創世神の頼みで、
ミオの師匠となる。

ジョウ

.....
獣神見習いで、
ミオの護衛役。
普段は黒いビューマの
姿をしている。
大きさは自由自在で、
人の姿にもなれる。

テラオミオ 寺尾美桜

.....
本編の主人公。
32歳の会社員だったが、
神様たちの喧嘩に巻き込まれ、
異世界に転生することになる。
そして、その際に4歳児に
なってしまう。

第一話 転生

「ふう〜、今日も疲れた〜」

私、三十二歳の会社員である寺尾美桜は、労働を終えて、コンビニで調達したビールとオツマミを手に、ご機嫌で帰路を急いでいた。そのとき――

ズガアーン!! ゴギヤガガッツ!!

「なんの音!?!」

突然響き渡った不可解な音に、狼狽した。それは、私がいる歩道からだった。歩道に亀裂が入り、裂けたのだ――私の足元で。

「……は!? うわああ〜!?!」

あまりの非日常的な出来事に、反応が遅れ、私は裂け目に飲み込まれてしまった。



「……ださい。起きてください!」

何か聞こえるが、すごく寝心地がいいお布団は離したくない。

「だめ……もうちょっと……」

「お願いですから、起きてくださいー！」

「あと五分……」

「起きてくださいー！」

「……おつとお!？」

微睡みの中で感じた不穏な殺気で、私は飛び起きた。

目の前にいるのは、わたわたと慌てているゴージャス美女だった。

金髪にエメラルドの瞳は、とつても綺麗。服はキトンみたいなやつを着ているが、もしかして、

古代ギリシャにトリップしちゃった？

「殺気がしたんですけど!? っていうか、ここはどこ?」

「ここは、神界。私は女神ウルシア。あなたがいた地球とは異なる世界です」

「なんでそんな場所に!？」

「道路にできた亀裂に飲み込まれたことを覚えていませんか?」

なんて恐ろしいことを言うんだ、この人は。亀裂に飲み込まれたら、生きていられな……あゝ、そういうことか。

「地球のとある神と喧嘩したのですが、手加減を間違えてしまいました」

テヘッと舌を出す女神。ほんと、いい加減にしてほしい。人一人の人生を終わらせておきながら、

反省しているのだろうか？

「……また、地球の神と喧嘩かのお?」

「ひっ!? 創世神様!!」

しわがれた……だけど威厳に満ちた深みのある声に、美女は怯えた。あれ、また誰か増えた? こちらに背を向けて顔は見えないけど老人? この人が創世神様とは……いったい、何が起きるの?」

「……説明するのじゃ、女神よ」

「はいっ!!」

女神は、背筋をピンツと伸ばし、創世神様に身振り手振りで必死に説明をする。私は完全に空気が抜いである。ついでだから、一緒に説明を聞いたよ。

女神が話した内容はこうだった。地球の神と喧嘩をしたまではないが、つい力加減を間違えて放つた神気がスパークしてしまい、地割れが発生。そこへ私が落ちたらしい。はは。そりゃ、一発KOだわ。「すまなかったのお。お嬢さん」

説明を聞き終えて、こちらを振り返った老人は、私に頭を下げた。

仙人みたいな杖を持つお爺ちゃ……創世神様。口元に蓄えたおひげが、喋るたびにモコモコと動き、可愛い。

「いやいや、悪いのはそちらの女神様ですよ? 創世神様は何も悪くないですよ!」

「……それでもじゃ。儂には、こやつの監督責任があるでの。儂は、この世界の創世神ガイアという。管理は、その女神に任せとるがな」

その表情には、後悔の色が強く表れている。目は、立派な眉毛まゆげに隠れ気味であまりわからないけど、こわね声は沈んでいる。

女神はどうしてるかって？ バケツを持って、立たされてますね。昭和かよ!?

「……そうですか。私は寺尾美桜と言います。それで私は、元の世界に帰れそうですか？」
念のために、ガイア様に聞いてみる。死んでるから無理だと思っけど……

「すまんが、お主の身体は地割れに飲み込まれてしまった。今は、魂だけの存在じゃ」

はい、キタコレー!! 異世界あるある殿堂入り「神様のドジで異世界転生・転移しちゃった!」
の状況にワケテカしながらも、私は神妙な顔つきをする。雰囲気ふんいき作りは大切である。

「お主も好きじゃな……」

しかし、ガイア様は先程の表情とは打って変わって、呆あきれたようにジト目で私を眺めていた。

「え？ 何がで……あゝ、心の声がただ漏もれなんですわ」

神界あるあるじゃん! 忘れてたわ。

「その異世界の知識があれば、今後の展開はわかるじゃろ？ さあ、世界の転生を望むか？ また、スキルなどの希望はあるかの？」

ガイア様がそう言うと同時に、ブオンツと透明なボードが音を立てて目の前に現れた。

フウ〜! 選択タ〜イムツ!

「さてさて、私のスキルをどうやって決めようかな？」

「うむ! これが、現在のお主のスキルじゃな」

ガイア様がパチンツと指を鳴らすと、ボードに文字が浮かび上がった。

スキル…行儀ぎよぎ作法 4 事務処理 5 商談 4 体術 4 剣技 3 語学 4

「お主は魂の状態だからの、スキルのみを表示にさせてもらった。ちなみに1が初心者、2が初級、3が中級じゃ。お主に一番多い4は上級じゃな。5が達人じゃのお。お主は商人向きか？」

「そうですね。日本では、多忙な会社員でしたし。異世界ではどこかに定住して、たまに旅をしたいですね。そうすると、冒険者か商人ですかねえ？ ……兼業もありかな？」

「ふおおおおお! 夢が広がるのお」

私がこれからの生活を想像していると、ガイア様は、威厳ある長い長い顎あごひげを撫なでながら、声も高らかに笑った。

私は改めてボードを眺める。すると、転生先の異世界の説明があることに気づいた。

「えつと……剣と魔法のファンタジーな世界。中世の時代の文明寄りだけど、トイレなど魔道具の性能が高い一面もあるよ。不便さもある情緒ある生活と、文明の利器が混ざり合う世界。戦争もあるものの、平和な国も多いから、そこがお勧め! ……かあ」

「どうじゃ？ 転生できそうかのお？」

ガイア様に、私は笑顔で首を縦に振る。

「はい! 異世界は、戦争以外にも危険なことはたくさんありますが、それは地球も一緒なので。」

戦争地域以外で、暮らしていきたいと思います」

「そうじゃな」

ガイア様は、私の意見に賛同してくれたようで、にこやかに頷うなずいてくれている。

「さて、スキルは何が欲しいかのお？」

「そうですね。まずは、初心者三点セットは外せませんね」

私は人差し指を立てた。

「三点セット？」

ガイア様が首を傾かしげた。

「言葉は通じない、土地勘はない、菌に耐久性があるかわからない……ということ、言語理解、【MAP】、鑑定の三つのスキルのことです」

【MAP】とは、地図でよいのか？」

「そうですね。異世界の全地図と現在地周辺の地図の二種類が表示できるようにしてほしいです」

「ならば右が全地図と、左側が現在地を含む周辺を表示させる地図とするかの」

「ありがとうございます。その地図は、指で伸縮操作する機能をつけられますか？」

「伸縮操作とな？」

「はい。こうやって、見たい場所を拡大したり、縮小したりして操作する機能のことです」

「ほうほうほう。便利じゃな！是非ぜひつけよう。他にはあるかの？」

ガイア様が乗り気なのは不思議だが、私としてはとてもありがたい。

【アイテムボックス】が欲しいです」

「ふむ。ちなみに【アイテムボックス】は、どういう理由でかの？」

ガイア様がおひげを撫なでつけながら聞いてくる。

「自慢ではありませんが、仕事はデスクワークで万年運動不足の体力なしです。そんな私が、急に大荷物を持って移動するのは無理があります」

私は、非力な現代人なのだ。友達のパックパッカーみたいに、二十キロや三十キロもある荷物を背負つての移動は無理である。それに、降ろされる場所にもよるが、森では、魔物や動物の襲撃にも気を配らなければならない。

「商人も視野に入れています！馬車移動は構いませんが、日本人にとって、食は命の次に大事！鮮度抜群な食品も諦あきらめられません！」

「生鮮食品を望むなら、時間停止つきの【インベントリ】かのお。【アイテムボックス】は容量に制限があるが、【インベントリ】は容量にも制限はない。ミオにはもってこいじゃろ？」

【インベントリ】！……こちらの世界では、そのような設定なんですね！」

「設定というのがよくわからんが、【アイテムボックス】は百人に一人。【インベントリ】は、十万人に一人のスキルにしておる。どちらが貴重かは、一目瞭然りょうぜんじゃろ？」

スキルにも差があるんだな。きっと、人気なとそうじゃないのがあるぞ……これは、追放後のざまあストリーターの始まりか？」

「それは、明確な差ですね。【アイテムボックス】の収納量は、個々の魔力量によりますか？」

「うむ、そうじゃ。魔力量で、容量は決まるぞ」

「なるほど……」

「あとは、何が欲しいかの？」

「あちらの服と下着を数日分、水、ナイフ、調理道具に食器や食料、アイテムバッグに見せかけた鞆、一ヶ月くらいの生活費を、【インベントリ】に入れてほしいです！ それと質問ですが、これから行く世界は、医療はどうなっていますか？」

私は、生きる上で無視できない問題を、ガイア様に尋ねた。

様々なラノベでは、治癒魔法やポーションの類の存在感が大きく、正しい医療の知識に乏しい傾向がある。

ガイア様の返事次第では、私が希望するスキルは増えることになるだろう。

「ミオが考えている通り、治癒魔法やポーションが主じゃ。医者もいるが、貴族や金持ちに囲われとる。また、領都や街には薬師ギルドがあつて、薬も揃っているじゃろうが……小さい町や村には、薬師の存在さえも珍しいかもしれん。じゃが、辺境や広大な森がある場所近辺には、薬草や豊富な資源目当てに、薬師が住み着いとるかもしれんのお」

「わかりました。では、病気になったときに備えて、薬が作れるスキルが欲しいです」

「ふむ、確かにな。せっかくお詫びとして転生してもらうのに、すぐに死なれては困るからのお……

よし、【調薬】というスキルはどうかの？」

「ちようやく……」

「うむ。ミオの世界では、薬剤師という職があるな？」

「はい、あります」

【調薬】は、その職そのものと思つてもらつてよい。調合レシピから薬効、さらに材料の詳細情報までを網羅したスキルじゃ。スキルの上達には、【調薬】を繰り返し行うしかないが、そこはミオの努力に期待しよう」

「もちろんです。ここまで整えていただいたんです。あとは、自分で頑張ります！」

「どれ、こんなところかの？ ああ、【特別隠蔽】と称号もつけておこつ」

「ありがとうございます。でも、【特別隠蔽】ってなんですか？」

称号はなんとなくわかる。きつと創世神様や女神の加護や転生者とかでしょ？ しかし、それは隠すほど物騒なものなのか？

【特別隠蔽】は、鑑定上位スキルの【神眼】でも見破れぬ、とつておきの隠蔽スキルじゃよ。称号は物騒ではないが、二神の加護を持つ者は、この世界の歴史で初じゃ。十中八九、聖国の者が騒ぐからの」

【インベントリ】でも思ったが、やはり、スキルに上位や下位があつた。しかし、聖国って何？ 名前からして聖職者が治める国だろうに、神が警戒するほどヤバイところなのか？

「ありがとうございます……へんな輩は、どこにでもいますしね」

「うむ。不埒な輩は、思う存分成敗するがいいぞ！ 儂の世界は、やらねばやられるからな」

「しかと心に刻みます」

地球……いや、日本の常識でいけば、あつという間に潰されるだろう。郷に入っては郷に従えだ。やられたらやり返すという気構えは、常に持つていよう。だけど同時に、情けは人のためならず……も持つていよう。

「あつ、ガイア様。魔法属性ですが、火水風土の四属性でもいいですか？ 魔法量は、魔法使いとしてお城に仕えられる量があれば助かります」

「ふむ、城勤めと同等じゃな？ ならば、これくらいが妥当じゃな。他にはないか？ とりあえず、これが今のスキルじゃ！」

名前…ミオ・テラオ

魔法量…200000

属性…火 水 風 土

スキル…行儀作法4 事務処理5 商談4 体術4 剣技3 語学4 MAP1 鑑定1

ユニークスキル…言語理解 インベントリ 調薬 特別隠蔽

称号…転生者 創世神ガイアの加護 女神ウルシアの加護

「おお、すごい！ 豪華なラインナップ！」

「四属性があれば生活魔法も問題なく使えるじやろうから、誰かに習うがよい」「ありがとうございます！」

「よいよい……おお、そろそろ時間じゃな。細かいことは手紙に認めて送るから、向こうで読んでくれ。では、気をつけてな」

「行つてきます！」

周囲が淡く光り出し、私の意識はゆっくり沈んでいった。誰かが追いかけてくるような気がしたが……



「知らない空だ」

チチチツ、チュンチュンと平和に囀る鳥たちが舞う空を見ながら、森の中で寝そべっている私は独りごちる。

地球にある月は、昼は白く遠くにあり、触れられる距離にはなかった。

だがこちらの月は「触れられるのではないだろうか」と思わせる近さだ。

木々が視界を邪魔しているが、神秘的な輝きはそれをものともしていない。むしろ、木々に陰影がついて、より月の美しさを引き立てている。

「綺麗だな。こんな月が二個もあるなんて、贅沢だにえ」

異世界転生は成功した私は、余韻に浸っていたけれど、何か違和感がある。舌つ足らずなのは、もちろんだが……



「私の声、高くないか？」

私は、寝転がっていた身体を起こす。すると目の前には、小さいあんよとお手々があるじゃありませんか。

「まあ、なんと可愛らしいふくつとまるつとしたお手々でしょう……」

現実逃避を試みるが、もちろん何も変わらない。

「……なんで、若返ってるんだろ？」

まったく心当たりがない……

『——欲張りすぎたんですよ。四歳で済んだのは私のおかげなんですから、感謝してくださいね！』

「脳内に直で声が聞こえるとか、嫌な予感しかない」

時々、呂律が回らないのはご愛嬌だ！ 気にしてはいけません。

『もおく、嫌な予感とか失礼ですね！ ウルシアですよ、女神ですよ！』

姿を現した女神は、頬を膨らませて『調整が大変だったんですよ!?』と少し怒っている。

「わかってますよ。ちょっとふざけただけです」

『それにしても、ちっちゃくなりましたね？』

女神は口に手を当て、ププツと笑いが零れそうになるのを堪えている。

「なんで、幼児化したか知ってますか？」

『さっきも少し言いましたが、ひとつはスキルを欲張りすぎて、元の身体が耐えられそうになかったんですよ。ガイア様にも苦言を呈しましたけどね』

「それで、縮んじやったんですにえ」

『ミオは加減がわからないのに、ガイア様つてば、神界の物差しでスキルを授けちゃうんですから！ ミオが四歳にまで幼児化したのは、スキルに馴染む身体がその年齢だったからです！ ……まあ、他にも原因はあるんですけどね』

「まあ、なっちゃったもんは仕方ないよね。長生きできる年数が増えたと思えば儲けもんだし。でも、それで慌てて降りてきてくれたの？」

そんなことだけで外界に降りてくる理由にはならないだろう…と、正直思う。そうすると、彼女は申し訳なさそうな表情になった。私はそれを見て再び嫌な予感がした。

ウルシア様は覚悟を決めたような顔をして、口を開いた。

『降りてきたのは、私から渡したいものがあったのと、ガイア様からのお詫びの品を預かってきたからです』

「お詫びなら、加護を貰ったよ？」

最高神の加護というものを貰ったと思っただけど、さらに追加でくれるん？

『ガイア様からのお詫びは、幼児化に関してです。ですが先に、私の謝罪を。このたびは、誠に申し訳ございませんでした。心より謝罪いたします』

「はい、受け入れます」

即座に答えた私に、ウルシア様は一瞬目を見張るが、すぐに控えめな微笑みを湛えた。おそろくホツとしたんだろう。

『それともう一人。私の喧嘩相手だった地球の神。名前は言えませんが、彼からもお詫びを預かっていきます』

「地球の神様から？」

ウルシア様は、豊満なお胸から、一匹の小さな動物をみよ〜んと取り出した。裏山けしからん。

『ミュー』

少しだけ嫉妬が生まれた私の耳に届く、癒しの鳴き声。

「…こ、これは、黒いけど、子供のピューマ!？」

そのもふもふを見た瞬間、私の身体に衝撃の雷が流れた。

朝やかな身体に、細長い魅惑の尻尾！ 太いおみ足！

「くう!？」

ちゃぶ台があれば、机をドンと叩いたのに!!

『ピューマという動物に見えるのですね。問題はなさそうだから、彼の実体をこれに固定しましよう』

「ピューマじゃないの？」

慌てて顔を上げた私に、ピューマ（仮）をだっこしているウルシア様が答える。

『この子は、地球の獣神見習いなの。この世界は、日本より物騒だから、護衛役にと選ばれたのよ。神は実体を持たないから、下界で暮らすなら、実体を創る必要があるの。今は子供サイズだけど、通常はもっと大きいし、そもそも大きさは自由自在に変えられるわ』

「ほえ。神様の見習い……そんな人が、私と一緒にいいんですか？」

護衛をしてくれるなんて、とても心強いけど、かなりのVIP待遇にビビっちゃう。

『彼の修行でもあるの。それに彼にしてみれば、人間の寿命は、昼寝をするくらいに体感よ……ね？』

『ワウ！』

ウルシア様の声がけに、獣神見習い様は、片足を上げて元気よく返事をした。

「……グフツ」

『『ビクッ!?』』

つい漏れてしまった私の声に、二人は身体を震わせる。それから私と距離を取り、何やらコソコソと話しはじめた。



『女神様。吾輩の主人は、こんな幼子で奇人なのですか？ 彼女は、不気味です。なんですか？

あの「グフツ」という声は……』

『幼子なのは外見だけよ。中身は三十二歳の成人女性よ。奇人は言いつぎだけど、動物が大好きみたいだから！ よつぽど嬉しいのね。それにしても、彼女のことは、やつから聞いてないの？』

『上層部から突然辞令が下りたんです。準備をするので、精一杯でした』

『そうだったの。アイツは、相変わらず大雑把ね。それならば、彼女のことを話しておきましょう

うか。彼女は、あなたと同じ地球に属する人族として生を受け、暮らしていたの。でも彼女の生は、突然終わりを迎えた。それも、私とあなたを遣わした神との喧嘩に巻き込まれて。彼女は被害者なの。生を強制終了させられた魂は、地球の輪廻には入れない。お詫びとして、私が管理するこの世界で、生をやり直す提案をしたわ。幸い、彼女はこの手の話が大好きで、難なく受け入れてくれたの。普通は、罵倒されてもおかしくないんだけどね……』

『そんなことがあったんですね。唐突な辞令に戸惑いましたが、それを聞いて納得しました』

『ふふっ、よかったわ』

「——お話は済みましたか？」



話に区切りがついたつばいところで私が声をかけると、焦ったように頷いた。

『え……ええ。それで実体の形は、ピューマでいいですか？』

『はい、お願いします！』

これから、ピューマと一緒に旅ができると思うと、「えへへ……」と自然と顔がにやける。

単身で仕事が多忙だと、どうしてもペットが飼えなくて諦めてたんだよね。

護衛役の獣神見習い様だけど、見た目はピューマ。それも子供サイズも可！ 浮かれるな、というほうが無理である。うん、無理。大事なことなので二度言おう！

私を見ているウルシア様も笑顔になっっている。恥ずかしくなり、それをごまかしたくて、私は視線を泳がせ鼻をポリポリと掻く。

『それでガイア様のことなんだけど、まずはこれを見てほしいの』

そう言って手をかざしたウルシア様の横に浮かび上がる半透明ボード。

「私のステータス？」

『ええ。神界で最終確認したステータスと違う場所があるんだけど、わかるかしら？』

名前…ミオ・テラオ

魔力量…200000

属性…火 水 風 土

スキル…行儀作法4 事務処理5 商談4 体術4 剣技3 語学4 MAP1 鑑定1

ユニークスキル…言語理解 インベントリ 調薬釜↑NEW! 特別隠蔽

称号…転生者 創世神ガイアの加護 女神ウルシアの加護

「NEW! がついているので一目瞭然ですけど、【調薬釜】ですか？ 貰ったのは、ただの【調薬】スキルだったと思うんですけど」

『ええ…ちなみに、転生前のステータスはこれね』

名前…ミオ・テラオ

魔力量…200000

属性…火 水 風 土

スキル…行儀作法4 事務処理5 商談4 体術4 剣技3 語学4 MAP1 鑑定1

ユニークスキル…言語理解 インベントリ 調薬 特別隠蔽

称号…転生者 創世神ガイアの加護 女神ウルシアの加護

『結果は事故のようなものですが…：始まりは、ミオの世界とガイア様の認識のズレです』

「認識のズレ？」

「始まりって…：ミスに段階があるの？」

『はい。ミオの世界では「薬を作るのは大半が工場で、薬剤師は基本的に医師の指示に従い、薬の調合・確認・説明を行う」という真実を知り、ガイア様は大いに慌てました。これでは、あなたの望むスキルになりません』

「それは…：私をすでに送り出した後だったから？」

『はい。唯一の救いは、神界と下界のタイムラグでしたが…：ここでも致命的なミスを犯したのです』

頭が痛いのか、眉間を揉むウルシア様。

「ありやうや…：まあ、重なるときは重なりますからにえ」

『他人事ではないのですよ…：とにかく、ガイア様も挽回するつもりだったのでしよう。ですが、

考えなしにスキルを与えたツケがここで回ってきました。これ以上のスキル付与は身体が保たないため、製薬スキルが魂に弾かれてしまったのです』

「おおぅ……ウルシア様が調整してくれたんですね？」

『はい。私の有能さ故に、ガイア様の自重なしの神具をつけることができました』

「ええ？ 神具？」

私は、変な声を出してしまった。スキル付与は魂に弾かれたのに、ガイア様の自重なしの神具は問題なかったの？

『はい。幸い、【調薬】をキャンセルしたので、ユニークスキルに余裕ができました。ガイア様はタイムラグの時間が迫っていたために、さらに慌てており気づいていませんでした。それどころか、それならば！ と弾かれないように、製薬スキルを一纏めにした神具を開発したのです。それがガイア様の神力全開！ 自重なしの末にでき上がった【調薬釜】！ ……私はそれをユニークスキルに設置し、なんとか調整を終えました』

「大変だったんですね。ありがとうございます」

まさか神界から下界に降りたわずかな間に、そんな騒動が展開されていたとは。

なお、ウルシア様に見せてもらった【調薬釜】の詳細はこうである。

【調薬釜】

創世神ガイアの神具。ガイアが年甲斐もなく、神力全開で、自重なしで製作した神具。自動充

魔の不壊が付与されているため、未来永劫可動が可能。様々な素材の抽出・分解・合成・製作がボタン一つで行える。また、用法・用量から必要な素材の指示など、あらゆる薬の知識を備えている。所持者の負担なく製薬もできる優れもの。

見た目は地球の炊飯器で、色んな機能が簡単に使えるようボタンもついている。本当に炊飯器にしか見えない。

このときは、すごいなーという感想しか湧かなかった。これがいかにとんでもないものと知るのには、もう少しあとのことだった――

『そして、そんなおっちょこちょいなガイア様からのお詫びの品は、これよ』

そう言ってピューマ（仮）を地面に降ろし、ウルシア様がまたもや谷間から取り出したのは、手の平サイズの卵だった。よく潰れなかったね。

でも、お詫びの品を見た私は固まってしまった。だって卵なのに、虹色なんだよ？ ファンタジーなものが出現したのだ。俄然興味も疑問も湧いた。なんの卵だ？

そんな私の疑問に、ウルシア様が説明してくれた。

『これは、鳥の卵なだけど……まだなんの鳥かはわからないの』

「へ？」

『迷彩卵という、とても希少な卵なの。生まれてくる種類は、魔力で決まると言われているわ』

「魔力……私の？」

思わず、自分を指差してしまう。

『ええ、そうよ。この卵には意思があつて、注がれる魔力によつて、生まれる鳥を決めるの』

「なるほど……私の魔力ですか」

私の言葉に頷いたウルシア様は、どこか不安そうだ。

「どうしました？」

『ガイア様が厳選したもののなんだけど、受け取つてくれる？』

おおう。私がいつまでも眺めているだけだったから、誤解している。

「もちろんです！ こんなワクワクした気持ち、神界以来です！ ありがたくいただきましゅ!!」

私はなるべくウルシア様の不安を取り除こうと、笑顔で受け取つた。焦つて早口になつたから、最後は囁かじまつたぜ！ いや、気に入つたのは本当だけどね！ さすが異世界！ 不思議な卵、ゲットだぜ!!

『よかつた！ さあ……少し長居しすぎたわね。私はそろそろ帰りますが、ミオの【調薬釜】はレアどころの話ではないですからね！ くれぐれも、アサシード聖国には気をつけてください。周囲の国の情勢などを記した書類を【インベントリ】に入れておきました。旅路の参考にしてください』

『はい！ 色々ありがとうございます！』

『あつ、そうそう。ミオの身元保証のことだけど。この世界にも過去に転移者たちがいたの。彼らは魔獣を従えていたことから『魔従族』と呼ばれていたわ。権力者に利用されないよう世間か

らは隠れてしまつたけど、ミオはその未裔という設定よ。だから、『神と縁のある者の証』として、黒い瞳に金色が星のようにちりばめられているわ。まあ、獣神見習いに必要書類や身分証を預けてあるから、詳しくは彼に聞いてちょうだい。じゃあね』

ウルシア様は、笑顔で手を振りながら消えていった。

「……は？ え？ ちよつ……待つて〜!？」

去り際の爆弾発言に、私の口は上手く動かない。ところどころで漏れる音は、言葉の体をなさず、私の叫びは空へと消えていった。

第二話 異世界情勢

「改めまして、ピューマさん、私はミオです。よろしくお願ひします」

ウルシア様の爆弾発言は、とりあえず置いておこう。今は自己紹介が大切である。肩につかないくらいの長さの私の髪が、頭を下げたと同時に揺れた。

今のピューマさんは、本来の大きさと二メートルほどの体長になっている。こちらのほうが楽らしい。

『吾輩は、獣神見習いの影之丞と申します。地球の神様から、ミオ様の護衛を承つております。よろしくお願ひいたします』

ふおお！ 姿がカッコいいと思ったら、名前までカッコいい！ 私のテンションも上がるというもの。朝やかな肉体が動くたびに、筋肉が唸るう！ キュンッとする。

「影之丞さん！ 今日はこちらを拠点にしたいと思いますが、いいですか？」

『そうですね。ミオ様ではテントを張るのは無理ですから、吾輩がいたしましょう』

「……？ その姿で？」

『確かにこの身体では無理ですが、こうすれば、容易に準備できますよ』

そう言うと、彼の身体は淡い光に包まれた。そして、光の中に見える影が濃くなっていく。

「ほおお〜」

私は、間の抜けた声しか出なかった。だって、光が収まると、そこには私と同じ黒髪で、短髪のワイルド系イケメンがいたから。瞳は金色。服装は唐の漢服のようなものを着ていた。鍛え抜かれた身体が、服の上からも丸わかりでえっつい。肌は地黒。黄土色服がとてもお似合いです。ところどころにある黒の刺繍がセンスいい。

「これなら、問題なくテントが張れるでしょうか？」

「うん、そうにえ。服が超絶いい。ついでに顔もいい」

「そうですか？」

少し照れたようにソッポを向いた。だが、視線はこちらを気にしている。デレか？ 最高か？

「急いでいたので向こうの服のままですが、人里に降りたら、こちらの服を調達しましょうか」

「ええ？ 駄目、そんなの!!」

「そつ、そうですか？」

食い気味に迫る私に、影之丞さんの上半身が引いている。

「そうだよ!! せつかく似合ってるんだし！ 仕事で来てるんだし。そもそも、人化は必要などきだけでしょう？」

「ええ……普段は人化前の姿で過ごしますね」

「それならなおのこと、故郷のものは大切にしなきゃ！ こっちにいる間は、影之丞さんも故郷に帰れないし。民族衣装は大事だよ？ 私も着物大好きだったし……いいよにえ!? 上手く言えないけど、せつかく持参してるなら着るべき。色々ともつたいない!」

あれこれ理由をつけたが、最後が本音である。グへへ。しかし、滑舌が悪いせいで、色々決まらなないな。

「では、服の調達はなしにしましょう。それでは人化したことですし、テントを張りますね。ミオ様は、枯れ枝を拾っていただけますか？」

「うん、ありがとう！ あと、私のことはミオでいいよ。喋り方も硬いし、楽にしよう？」

「かしこまり……わかった。では、吾輩のことは、ジョウウでも呼んでくれ」

「うん、ジョウウ!」

お互いの呼び方も決まり、私たちは、野営の準備に精を出す。

私は枯れ枝を拾い、テント近くに置いた。テントは、ジョウウが持ってきていたやつだ。私が自分を出す前に、テキパキと準備を始めている。

だから私は、ガイア様に用意してもらったテントが【インベントリ】に入ってるんだけど、まだどんなものか確認していない。

また、下界に降りてきたのは、朝だったらしい。月が間近に迫る感動で、すっかり時間を忘れていた。今は太陽が頂点から少し傾いている。お昼すぎといったところか。

「夕飯を作るには、まだ早いかな」

私がそう呟けば、ジョウウから提案があった。

「ウルシア様からいただいた資料を読んではどうだ？」

「そうだにえ！ 読んでみるよ」

早速、【インベントリ】を開き、中をゴソゴソと探れば、手に紙束が触れたのでそれを取り出す。頭に思い浮かべれば、それが手に吸い寄せられるんだから、大変便利な収納である。

各国の情勢と異世界の生活

世界・ユーザフェース

ユーザフェースにある最も大きな大陸：アカラント（その他に多数の島が存在）。

アカラント大陸にある国：サーザン帝国・ユーラン公国・クリーク連合共和国・アサシード聖国・

フリータール王国・その他、エルフやドワーフなどの亜人・獣人といった種族が深層の森に集落を構えている。

言語：世界共通語・各国の暦語・神聖語（資料がごくわずかのため、失われた言葉と言われている）

③・各種族の族語（エルフ・ドワーフ・魔人族・各獣人など）。

貨幣：G……基本的に、アカラント大陸の共通貨幣。しかし、地方の小さな集落はまだ物々交換が主流。1Gは日本の十円にあたる。

鉄貨一枚⇨1G⇨10円 銅貨一枚⇨10G⇨100円 銀貨一枚⇨100G⇨1000円 金貨一枚⇨1000G⇨1万円 大金貨一枚⇨1万G⇨10万円 白金貨一枚⇨100万G⇨1千万円 虹金貨一枚⇨1千万G⇨1億円

現在地：深層の森の上空にある浮島で、聖域になります。アサシード聖国という、ウルシアちゃんを信仰している国の上空に浮いている島です。ここは人間の管理外の場所ですが、アサシード聖国の教皇と加護持ちのみ、足を踏み入れることを許可しています。ただし教皇は、正当な理由があるときだけです。それは基本的には、聖域にある薬草類を採取する場合があります。

「聖域って……浮島だったのか。どうりで、月が近いわけだよ」
妙な納得をしながら、私は次へと読み進める。

聖域侵入条件

- ・加護持ち⇨無条件。フリーパス。
 - ・教皇⇨申請書献上。審議の上、許可。
- 地図は【MAP】に表示しています。

ウルシアちゃんのお勧めは、フリータール王国よ♡

「……さて、【MAP】を見てみようかな？ 【MAP】、オープン！」

ブオンと電子音を立てて開いた【MAP】には、右にいくつかの大陸があった。左には灰色一色の中に、鮮やかな色をした場所がわずかにあった。そこにはピンが二本立っている。

「右がユーザフェースの全地図か。左は現在地とかがわかる実用的な地図だろうにえ。グレーの色で薄く表示してあるのは行ったことがないところかな。ピンが立っているのが私がいるところだにえ。国境線は、多少濃い色で線が引かれてるけど、わかりづらいな……これが、深層の森だにえ」

大陸のほぼ真ん中に、デンと陣取るだっ広い森は、一目でわかる。森の一言で終わらせてしまっ
ていいのか、疑問が残るほどの広さだ。森だけでなく、山脈も一杯だ。その周囲に、国が散らばってる。

「私がいる浮島の下にあるアサシード聖国は、森が世界の中心だとしたら、北東か。そしてクリーク連合共和国が、東から南東にある。その下がフリータール王国だね。ウルシア様のお勧めは、南の国か」

アルプス山脈みたいに広がる山々は、南西から北西にある。サーザン帝国は、フリータール王国の西の国境沿いから聳え立つ、山脈を越えた先にある。ユーラン公国は、アサシード聖国の北に位置する。

「サーザン帝国は、チリみたいに細長そうな国だな。山脈がフリータール王国と断絶するように延びている」

帝国って、ラノベでもあまりいい印象がないんだよな。国として、悪役で書かれることが多いし。

「各国の特色はどんな感じかな？」

ズラッと並んだ国の説明文に、私の視線は吸い寄せられた。国情がわかれば、私が行きたい国も自ずと割り出される。

サーザン帝国…

皇帝が治める。実力至上主義。皇帝の方針で、次代は自身の子女の中でもっとも強い者に即位させると発表。以降、次期皇帝を狙った命を懸けたサバイバルが開始され、兄弟姉妹間で勃発した争いは、激化中。

そして、お家騒動に巻き込まれて犠牲になる民が増えている。特に、無能な後継候補により散る命は多い。候補者一人につき三名の審判官がつき、皇帝に定期的に報告している。

このように、国を挙げた実力至上主義は、力の弱い者を虐げる傾向が強い。
奴隷制度有り。また、違法な奴隷狩りが後を絶たない。

帝国は腐り、斜陽が始まっている。

ユーラン公国…

北にある小さな国。一年の半分を雪に閉ざされている。人口は少ない。主な産業は、奴隷販売。隣国のサーザン帝国はお得意様。ダンジョンが三つ存在しているダンジョン国家でもある。ダ

ンジョンからの掘り出しもののオークションも目玉。感想は特になし。

クリーク連合共和国：

商業ギルド本拠地。商人の国。様々な物品が集まる流通の要。エルフ・竜族・ドワーフ・獣人が集まりできた国。封建制度ではなく、各種族の代表が持ち回りで首長を務める。議会制度を採用している。

エルフの国は魔法学園、竜族の国は騎士学園、ドワーフの国は職業専門学園、獣人の国は冒険・傭兵鍛錬所をそれぞれ経営している。故に、学園国家としても名高い。他国からの留学生も多数。法人で最も魔導船を有する国である。発展途上の国よんっ

アサシード聖国：

ウルシアちゃんを信仰する神聖国家。だが最近の教皇の方針で、危うき道に進み出した要注の国である。聖域でポーションの素材が採れるからって、薬師ギルドの本部を置くなどして、ポーション作りを独占しようとしてるし……詳しく説明したくない……

フリータール王国：

フリータール王国は、国王が治める専制政治の国である。貴族制を採用しており、各領地にそれぞれの領主が存在している。また各領地には、国の権力からは外れた独立機関の冒険者ギル

ド・商業ギルド・職人ギルドがある。

人族至上主義を謳う聖国や帝国などの差別主義的国家とは違い、多くの人種が集う多民族国家となっている。

それぞれの種族の得意分野を活かした産業を先進政策として扱っており、他国との貿易も盛んな活気ある国。

また、帝国や公国とは違い、フリータール王国は奴隷制度が撤廃されている。ただし、国の厳正な管理のもと、犯罪奴隷と借金奴隷のみは存在している。

フリータールはお勧めよ♡

「ちよいちよい私情挟んでくるやん……」

「どうした？ ミオ。随分熱心に読み込んでいたな。こちらは、テントの設営が終わったぞ」

「ありがとう、ジョウ！ ウルシア様から貰った資料を読んでただけど、国の説明で、たまに私情が入るから呆れてただけ」

はは……と乾いた笑いを浮かべる私に、ジョウは私見を述べた。

「そうか。ウルシア様も色々あるんだろう。愚痴をこぼす相手がいないから、ミオに伝えたんじゃないか？ それより、どこかい国はあったか？」

それよりって、この場面をウルシア様が見てたら、多分怒られるよ？

「そうだにえ。クリーク連合共和国かフリータール王国かな？ ウルシア様は、フリータール王国

がお勧めみたい」

説明を読むと、私もフリーターが妥当だと思うけど、ジョウはどうだろう。

「多種族国家のフリーター王国でいいのではないかと。政権が怪しい帝国も聖国も、加護を持つ

ミオは望まない国だろう。吾輩もウルシア様の加護をいただいているが、もちろん拒否だ。人間の醜い部分を知る吾輩にしてみれば、聖国が聖域に執着しているのは、火を見るより明らかだからな」

ウルシア様の書類をしばらく眺めたジョウも、フリーター王国に賛成のようだった。

「なら、フリーター王国にしようかな」

「ああ、吾輩も賛成だ」

というわけで、私たちの行き先は、フリーター王国に決定した。

キキィ、キキィ〜！

なんか、既視感のある鳴き方だな。鳴き声は違うんだけど……と、空を飛ぶ鳥を見上げれば、太陽が沈みそうだった。

「だいぶ時間が経ってみたいにいえ。ご飯作らなきゃ！」

思いのほか長々と資料を読み込んでいたようだ。私は、何を作ろうかな？

「何がいいかなあ？」

【インベントリ】に手を突っ込みながら、メニューを考えていると……

「……ん？ ……おお!? ガイア様ってば、調味料だけじゃなく、調理器具まで完璧に揃えてくれる!! ……すごいリストの数だ!!」

なんと! 【インベントリ】に入っている様々な料理関連のもののリストが、目の前に現れたのだ!

調味料は揃えてくれると聞いてたから期待はしてたけど……正直、調理道具については諦めていた。

「おお……おおお……」

「どうしたのだ？」

興奮や感動で、言葉にならない。口から漏れ出るのは、感嘆の声だけ。

ジョウの疑問に答える余裕も、今はない。もう少しだけ待ってね、ジョウ。

私が震える手で『魔道焔炉』をポチると、【インベントリ】からそれが自動で出てきた。

「コンロ……いや、魔力の気配があるな。これは、こちらの世界の道具か？」

ジョウは二口コンロをしげしげと眺めている。

「……なるほど。リストの名前からもしかして……とは思ってたけど、こちら仕様になっているのか! こんなに手を尽くしてくれるなんて!! 素直に嬉しいです! ありがとうございます、ガイア様!!」

しかし、ジョウは魔力が見えるのか。すげえな。この世界で暮らすとなると、魔道具を使うことになるとは思っていたけど、まさか初端から使えるとは予想外だった。

だって、ウルシア様の資料によれば、魔道具ってお高いんだよ? 何か欲しい魔道具があれば、じっくりお金を貯めてから買うつもりだったからね。

ちなみに、これでいくらかかな？ 二口焔炉ふたくちコンロを鑑定する。

魔道焔炉マジロ・着火の魔法陣が仕組まれた魔道具。火の強弱を、運転つまみにより調整可。稼働には、火属性の魔石が必要。販売希望価格は金貨六十三万六十三万円一枚。

うん、素晴らしい！ 性能は、まんまコンロだな！ そして、金貨六十三枚か。販売希望価格だから、売値はさらに高額だ。やはり、魔道具は高かった。

ちなみに、古代に存在した高度な文明により作られた強力な魔法の道具——アーティファクトは魔道具と呼ばれ、現代人が開発したそれは、魔道具と言われるという。不思議。

そして、ウルシア様の資料にあったクリーク連合共和国の学園が所持するという魔導船は、古代遺跡から発掘されたアーティファクトである。

ピコン！

「ん？ なんの音だ？」

何かを知らせる音が鳴り、私は【インベントリ】のリストボードに目を向けた。

「……メール？」

便箋に羽根ペンという手紙らしき絵が書かれたマークが、ピカッピカッと点滅を繰り返していた。「まさかガイア様かな？」

今の状況だと、思い浮かぶ相手は彼くらいだ。私は、そのマークに触れる。そうすると、リスト

ボードの上に新たなボードが現れた。

「半透明なボードがたくさん出てくるなんて、近未来みたいに感じるけど、ここは中世から近代くらいの異世界なんだな」

実にアンバランスな世界観だ。感覚がバグりそう。しみじみと吹きながら、新たなボードに目を走らせた。

地球の神に許可を貰い、ミオの家にあった調理器具、調味料やお皿などなど、使っていたものを全て収納したからのお。使ってくると、嬉しい。ガイア

もちろん使いますとも〜！ 私は嬉しさのあまり舞を披露した。

「何をやってるんだ？」

ジョウからは困惑した目を向けられた。これは、美味しさ……食の楽しみを知る者にしかわからない感動だ。

「日本の私の家にある台所の調理器具や調味料を、ぜんつぶ持つてきてくれたみたいなの！ 【インベントリ】にある食材次第だけど、これで日本食はおろか、中華や洋食も作れるよ！」

私は踊りながら、食の可能性だけでなく、これでよろこ——
「本当か!? 吾輩は、味噌汁が飲みたいぞ！」

……なるほど。ジョウはどうやら、食いしん坊に分類される生物だったようだ。

「けっこう自炊歴も長かったから、道具も色々買い込んだのが吉と出るとは……食料もいっぱいあるし。これだけあれば、色々作れる」

「味噌汁は!?」

「作れるから、大丈夫だよ……いつそのこと、豚汁にする?」

ジョウと話しているときにふと目についた、リストにある『豚汁の素』『豚汁用野菜セット。カクト済』の文字。

「繁忙期の嬉しい味方。簡単調理セット! こんなものまで【インベントリ】に入れてくれたなんて……文字通り、ほんと全てだな」

小さい身体だ。野菜が切りにくいなど思っていたので、これは助かる!

「豚汁だ!? 豚肉があるのか! ……よし、それだ! 今日の晩飯は、それに決定だ!」

鼻息も荒く喋るジョウ。なぜだろう? 今は人化してるはずなのに、ブンブンと、はち切れんばかりに振られている尻尾が見える……ちよっ!? 本当に尻尾が揺れてるやん!?

「ジョウ! 尻尾!」

「何を言っている? 吾輩は、失敗をする子供の時期は過ぎている。人化しているときに尻尾など、祖國の神祖國に笑われ……なぬう!? ……これは違うぞ!? 吾輩の尻尾ではないぞ!」

「……」

そう言いながら、手で押さえているのはなんだよ? と突っ込みたくなるが、ジョウの必死さが憐れみを誘ってしまう。

「しゃて、ご飯の準備をしましょうかにえ?」

これ以上は何を言ってもやぶ蛇だ。あえて触れないようにごまかせば、慣れない私は気が散り、舌を噛んでしまう。

「いちゃい……」

痛みに堪えながら、夕飯の準備に精を出す私と、いまだ尻尾との格闘に精を出すジョウ。カオスな場面のでき上がりだった。

「それにしても、魔道具を出したときに言ってたけど、ジョウって魔力が見えるの?」

アイテムバッグから出した鍋に水を入れ、具材と豚肉をぶっ込む。私は自炊をするけど、友達に言わせれば、やり方が『男料理』だそうだ。

まあ食べられるなら細かいことは気にしないので、調理にそれが表れているんだろう。

「ああ、我は獣神見習いだからな。魔力を見るなど、朝飯前だぞ?」

ジョウは中が気になるのか、鍋をチラ見しながら返事をする。食いしん坊の名前は、君にそのまま定着しそうだね。

「すごお。私も何かできるかな? スキルでは、魔力視とか希望しなかったし」

「ウルシア様たちから授かった、加護の恩恵は確かめたのか? 貴重な能力を手に行っているはずだが……」

「そうだった!! 色々あって、すっかり忘れてた! 後で、確かめてみるよ」

などと話していれば、鍋がいい具合に煮えてきたので、菜箸をじゃがいもにプスッと刺して、火が通ったか確認する。

「おっ！ できてる、できてる。あとは少し冷ましてから、豚汁の素を入れましょう」

「ご飯が炊きあがる頃には、盛付けも済ませ、これでもう「いただきます」をするのみとなった。

「それにしても、ウルシア様が最後に暴露していったアレ。どうしてくれようか？」

「……アレとは、魔徒族のことか？」

「それもああるけど、アレといえは、アレよ。瞳の色彩問題！ 『神と縁のある者の証』なんて、爆弾発言を去り際にしないでほしい。魔徒族に関しては、ジョウに詳細を預けるって言ってたけど、何か預かったの？」

「うむ、魔徒族の記録をな！ 彼らが、転移者であることは聞いただろう？ 世界を渡る転移には、少なからず神の干渉もあった。だから彼らの黒い瞳には、金色が星のようにちりばめられている。これは、この世界の魔徒族の伝承にも残っているようだな。ウルシア様は、権力者に利用されないように隠れたと言っていたが、その権力者の中に聖国も含まれていた。魔徒族の七割は神々の加護を持っていたというからな」

「また聖国？」

うんざりしてきた私は、もはや聖国に対して嫌悪感しかなかった。各地にある教会でもウルシア様に会えるけど、行くときは十分に注意が必要だね。

「伝染病が定期的に流行するため、薬はいくらあっても足りない。この聖域にある薬草類は、陸上
の薬草類よりも、遥かに効能・品質が上回る」
「そりゃ、聖域ですし？ 空気や魔素の類の質からして、全然違いますよ？ 結果、生態系の品質が違っても不思議はないでしょうよ。考えたらわかるでしょ？」

「口悪く話しながらも、私は豚汁の素を入れるために鍋の蓋を取る。私のヤサグレ具合に、ジョウは苦笑いだ。」

「そこまでしても、ポーシオン作りを独占したいのさ」

「……それって、やばくない？」

うへえ……と思いつつ、私は鍋の中身をぐるぐるかき回す。いい匂いが漂う。ジョウは人化しているのに、鼻はピクピク、まだはみ出ている尻尾はパタパタ。幸せそうで何よりである。

「どうだろうな？ 人間の欲深さは、底が知れん。やつらは、自分の都合のいい解釈しかできないからな。そんな話の通じんやつなど、相手にしても疲弊するだけだ」

「あはは。相手にするだけ無駄ってか？ ……気持ちにはわかる」

ジョウの視線は、私の手にするお玉に集中。酔わないでよね？

世の中が自分を中心に回っていると考えるお花畑な人は、どこにでも存在するからね。手に負えないよ。

だが私がこの世界に来たことで、近い将来、ポーシオン市場が混乱する騒ぎになるのは間違いないだろう。

私たちが加護持ちなのは、瞳を見てわかるのは仕方ない。ジョウなんて瞳そのものが金色だから

ね。問題は、降りかかる火の粉を払う手段を持ち得ているか、だ。

魔従族は、いわゆる俗称だという。ウルシア様は、『魔従族を名乗ればいい』と言ったが、今はどんな反応をされるか。場合によっては、どこかの組織に所属しなければね。

この先を考えれば、有力なのは冒険者ギルドか商業ギルドあたりだろう。急ぐべきだが、評判の悪いギルドはお断り。慎重に考えなければ。

「米が炊けてるぞ？」

私が考え込んでいたら、横からソワソワしている食いしん坊に声をかけられた。いかにも、待ち切れないと言わんばかりに、目がキラキラと輝いている。

私は噴き出すのを堪えて、「はいはい」と軽くあしらう。

「今からよめますよ。ジョウは、枯れ枝に火をつけてくださいな」

そろそろ夕日が沈む。太陽の光は、また明日。

「っ！ わかった！ おとなしく待ってよう！」

これは使えるかも？ 何かのときには、食べもので釣ればチョロリンコでは？ クククッ！ 弱みを握れたぜ。

「それにしても、ガイア様が『詳細を書いた紙を送る』って言ってたけど、まだ来ないかな？」

「ガイア様は創世神様だ。忙しいだろうから、もう少し待ったほうがいい」

「やっぱり神様は忙しいか。気長に待つか。それと、迷彩卵に魔力をあげるには、どうすればいいのかな？」

いただきますをしてお飯を食べながら、私は転がり防止の卵置きを見つめる。様々な色のカラフルな卵は、微動だにしない。

「ハグハグッ……寝るときにでも抱いていれば……ングッ！ ……身体から漏れ出る魔力を吸うはずだよ」

「そうなんだにえ。でも、潰してしまわないか心配」

食べるか喋るか、どちらかにしようよ、ジョウ。お行儀悪いよ？

「ははは、ミオも面白いことを言う。その卵の殻は、世界一硬いのだ。岩にぶつけても割れまい」

「え!? そんなんじや、中にいる雛は、どうやって出てくるのさ!？」

「中からの衝撃には、脆くできている」

「ご都合だね、ははっ」

「自然の摂理だ、ははは」

「あはははっ」と笑い合う私たちの和やかな夕餉は、初日を締めるには十分だった。

第三話 加護と旅立ち

翌朝。

簡単な朝食を済ませた私は、加護について鑑定することにした。ちなみに、ジョウは獣化した姿

で散歩に出かけている。

「まず、ガイア様の加護を見てみよう」

創世神ガイアの加護…加護を授かった者の守護者を創造（チャンスは一度のみ）。方法は魔法紙に姿形を描き、能力の詳細を書いて、「クリエーション」と唱える。

「これは、ホムンクルスの神族版？ 幼児化のお詫びで、迷彩卵を貰ったのに、ちと大盤振る舞いじゃないかな？ ……次、ウルシア様」

あまりに壮大な内容に、私は気が遠くなるが、まだウルシア様が残っている。気を取り直して、鑑定を進めることにした。

女神ウルシアの加護…女神の祝福（距離は関係無し）。経験値五倍（パーティー可）

『どうだ？ 加護の効果を見たか？』

「……見たよ」

ジョウが帰ってきた。獣化中の引き締まった体軀から伸びる足が、悩ましい。私は、ジョウも加護を貰っていたことを思い出す。

「ジョウも、ウルシア様の加護を貰ったよにえ？」

『うむ！ 吾輩の加護の効果は、女神の励ましと経験値十倍だ！』

「励まし？ 私の祝福だったけど…」

『個々によって、少しずつ違うぞ？ 吾輩は、自身に強化効果がある。ミオの祝福は、他人にバフを付与できる。効果は、十五秒間の百パーセント上昇だ。注意すべき点は、クールタイムが十五秒あることだ』

「ゲームみたいだな」

『確かにそうかもしれないが、ミオにはこれ以上のスキル追加は危険だからな。加護や卵、吾輩で、守りを徹底したいのだろう。神々が、ミオを大切に思っているという証拠だ』

「ありがたいけど、こそばゆいにえ。私は何もお返しはできないんだけどな」

私は、頬をポリポリ掻きながら、曖昧に笑う。手厚すぎても反応に困る。遠慮の気持ちは湧いてくる。さすが元日本人。私のそんな気持ちを知ってか知らずか。ジョウはきつぱりと告げた。

『なあに。ガイア様たちは、お返しなんて求めてないぞ。ミオが異世界を楽しめるように、精一杯手を尽くしてくれたんだ。感謝こそすれ、遠慮することはない』

「……そうか、そうだよにえ。ガイア様は、生活用品にも気を遣ってくれるぐらいだもん。本当に、ありがたいにえ」

心が満たされるのを感じながら、私はだらしなく相好を崩す。

『ふっ、ミオの自然な表情は可愛いな。普段から、そうやって素直にしていればよい』

『どういう意味!? 私は、普段から素直よ!』

ジョウにからかわれ、私はプンスコと怒る。

『ははは』

私の怒りなど、どこ吹く風と言わんばかりに笑い飛ばすジョウ。

「遊ばれた……気晴らしに、フリーター王国への行程でも調べよ」

『フリーター王国まではどのようになっているんだ？』

何事もなかったように、ジョウが口を挟んできた。おのれ！……今日の晩ご飯は、少なめにしちやる。

「ちよつと待つてにえ。【MAP】、オープン」

地図を確認した私は、枯れ枝に手を伸ばす。私は【MAP】の地図を見ながら、その枝でガリガリと地面に地図を書き写す。

「ここが、私たちのいる浮島。その下が聖国。で、隣がクリーク連合共和国。ここが、様々な人種が集まって作られた国だにえ……で、その隣がフリーター王国だよ。各国の内陸寄りの辺境に接する巨大な丸は、深層の森と言つて、広大な森だよ」

私は、ザーツと大きな大きな丸を描く。

『ふむ。これが、この世界の未開地だな』

「うん。この浮島と同じように、天然資源がガツポガツポだと思つう」

『言い方はどうにかならんのか？ まあ、そう上手いことにはいかながな』

「なん……魔物？」

ジョウの言葉に、私はすぐに原因が思い浮かんだ。

『そうだ、魔物の存在だ。この深層の森の深部には、高ランクの魔物が跋扈しているだろうな』

「そんなのがいたら、危険を冒してまで採取には行けないにえ」

残念……と、私が項垂れていると、ジョウは言う。

『そんなことはない。吾輩と一緒に、容易いことだぞ？』

「そりゃ、獣神見習いのジョウだもん。その辺の魔物なんか、目じゃないでしょ？ ラノベによく出てくるエンシェントドラゴンがいい勝負じゃない？」

ジョウがどれくらい強いかわからないが、最上位の魔物ならば、容易いことはないだろう。

『異世界の竜か。地球にも龍はいたが、攻撃方法は違うのだろうか？ 是非一度、手合わせしてみたいものだ』

「地形が変わりそうだから、勘弁よ」

避けられない戦闘以外は、断固拒否である。巻き込まれるのも嫌だが、争うのはあまり好きではないのだ。

「陸路でフリーター王国まで行くとすると、半月以上はかかるにえ」

天候が晴れで落ち着いていればいいが、そうもいかない。人目を避けて、深層の森に入る手もあるけど、まだ慣れてない世界では悪手だ。

『それならば、吾輩が飛ぼう』

ん？ 吾輩が飛ぶ？

